

## 「心のバリアフリー」をめざして

最近の図書館は、駐車場から入り口までスロープがあったり、子どもにも貸し借りがしやすいようにカウンターが低く作られていたり、施設のバリアフリー化が進んでいます。

この前も私は娘と二人で、図書館に借りていた本を返しにいきました。休みの日の図書館は、混雑しており、返却カウンターにも多くの人が並んでいる状況でした。

私は、滋賀県が平成25年度の図書館貸出し数が全国一番になるのもうなずけるなあ、と思っていると、小学生の娘は「キッズコーナーにいつてくるわ。」といい、児童書を読みにいきました。私は、「借りてた本、返却しとくわ。」と娘の背中に声を掛け、返却カウンターに並びました。

私の前には、車いすを利用されている男性とその人を介助されている女性の二人組がいました。図書館に来られるのも大変だなあ。でも、最近は、どこでもバリアフリーになってきてよかったなあ、と私はぼんやり思っていました。

二人の順番が来て、男性が、返却カウンターに本を出されました。係の人は、後ろの女性を見ながら、「延滞ですので図書館の利用カードを、お出してください。」と言いました。すると、女性は、『えっ、私?』といった顔をされ、男性は曇った顔をされました。

少しのためらいの後、その女性は、何か決心したように、「本を借りているのは彼です。車いすを押している私ではなく、彼に直接、話をしてください。」と係の人に静かに言いました。

係の人は、「あっ」と言って、男性に改めて延滞である旨の説明をされました。男性は何事も無かったかのようにあらかじめ自分の手に握りしめていた利用カードを出されました。そのやりとりを見ていた私は、もしかしたら・・・と思いました。

この二人は、普段からいろいろなところに二人で行っておられるのでしょうか。そのたびに、彼女は、彼に用事があることでも自分に話しかけられることに対して違和感を持っておられたのでしょうか。障害のある人に用事があるのにもかかわらず、障害のない人にだけ声をかけることは、障害のある人を一人では何もできない人だと決めつけた対応と映っていたのではないのでしょうか。

本を返却した後、私は、本を読み終わった娘とともに出口に向かいました。すると、出口を出てすぐの駐車場に車が止まっており、先ほどの二人が車に乗ろうとされていました。

その時、私は、ハッとしました。

車いすの男性が運転席に乗り込まれたのです。先程の係の人と同じように私も、障害のある人は連れてきてもらっておられる、と決めつけていたことに気づきました。

障害のあることは、少し不自由なところもあるけれど、決して不幸ではない、という話を聞いたことがあります。障害のある人もない人も共に尊重し合える関係とはどうあるべきか考えさせられました。

今回の出来事は、私にとって、あらためて人権のアンテナを高くして「心のバリアフリー」をめざす必要性を感じる出来事でした。